

遙かなる海

高橋玄洋



定価 六八〇円

発行日 一九七六年五月三〇日

＊検印省略

遙かなる海

0093100110218001

＊落丁・乱丁本は本社
またはお求めの書店で
お取替えいたします。

著者◎ 高橋玄洋

発行者 竹内肇

発行所 三笠書房

東京都新宿区戸山町三五番地

電話東京〇三(二〇三)七七八一(代表)

振替口座東京三一二二〇九六

郵便番号 一六二

誠宏印刷／宮田製本

高橋玄洋

遙かなる海

目次

第一章	めぐり逢い
第二章	確執
第三章	追想
第四章	逃避行
第五章	交錯の日々
第六章	海からの声
第七章	愛の行方
第八章	暗い軌跡
第九章	脅迫
第十章	秘密
第十一章	遙かなる海

233	211	185	168	146	119	99	74	48	20	7
-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	----	----	----	---

遙かなる海

第一章 めぐり逢い

一

人と人とのめぐり逢いほど不思議なものはない。ことに人間が満ちあふれている大都會の中で、この人こそ自分にとって「唯ひとりの異性」と思えるような相手にめぐり逢うことは、ほとんど運命的だ、といってもいいだろう。

真山宏がめぐり逢った山野辺菜美江は、そういう女性であった。

宏が菜美江と逢ったのは、今から二年ほど前、彼が父、仙三の会社を出て日野土建に移った頃のことである。

会社における父親は、家庭の父親とは全く別人の観があった。仕事をとるためにはあらゆる

努力を惜しんではならない、という名目で、積極的に役人や政治家の機嫌をとるかと思えば、またその一方で、社風に反したからといって、冷酷に従業員の臍を切ったりする仙三は、家庭にあつては、子供たちを前にして、つねにヒューマニズムを説く、無類にやさしい人間でもあったのである。

宏が強い反撥を感じたのは、彼のそのような二面性だった。

「役人や政治家に賄賂を使わなければ仕事ができないような会社なら、いっそつぶしてしまつた方がいい！」

父仙三に面と向つてそんな憤懣をたたきつけ、宏は会社を辞め、同時に家を出た。

だが、アパート生活をはじめたものの、たちまち彼は金に窮してしまつた。むろん就職運動はしたが、学生時代に新左翼のあるセクトに属していたことが祟つて、行く先ざきで態よくこたわられてしまつたのだ。結局、親戚に泣きついて現在の日野土建に入つたわけだが、この会社は、父親の会社が五十パーセントの株式を所有している、ということがあとでわかり、宏は再び深い挫折感に捉われざるを得なかつた。

銀座や新宿のバーへ足繁く通いはじめたのもちやうどその頃のことだった。酒を呑んで、おのれの思考を麻痺させるのが、彼にとっては実行可能な唯一とつての行為だったのだ。

そのようなある日、宏は銀座の並木通りにあるナホトカというバーで、ひとりの奇妙なホステスに逢つた。

眼もとにかげりのある、いつも静かな声で話しかけてくるそのホステスは、化粧ほど嫌いな

ものはない、というのである。化粧をすると美しく見えるどころか、顔の感じがきつくなり、自分とは似ても似つかぬ異様な人間になってしまふ、それがなんとも怖ろしいし、不安で仕方がない、というのだ。

他のホステスにいわせると、元来、化粧ののらない肌というものがあって、それは肌理きめが細かいからなのだが、彼女もそうなのだという。彼女が化粧嫌いを誇張するのは、つまり自分の肌の美しさを自慢しているのだ、というのであった。

宏がそのホステスを奇妙だ、と思ったのは、口紅ひとつつけようとしなからではなかった。彼女は流行歌が嫌いで、それならばクラシックが好きか、というところ、そうでもなく、ときおりテレビやラジオから流れてくる謡曲や読経の、あの地獄の亡者どものうめき声とも思えるような陰々滅々たる音声に、ひどく人間的なものを感ぜてしまふ、というのだった。

そのホステスが菜美江だったのである。

くせのない長い髪が、いつも湯上りのような清潔な匂いをただよわせている彼女は、宏と同年なはずなのに、まだ二十歳はたちの少女のような幼ない感じに見える時もある、そんな彼女が、読経の斉唱に心を惹かれる、というのだから、宏は眼をみはらずにはいられなかった。

宗教団体の信者でもないのに、流行歌より読経に魅力を感じたり、謡曲に人間的なものを感じたりするのだろうか。彼は菜美江に聞いたことがあった。

「なぜって……そうね、歌謡曲の歌って、みんな上っ調子でしょ。口ずさんでいるうちにちがう、嘘っぱちだわ、でたらめだわ、って反撥を感じちゃうのよ。歌詞が上っ調子なのか曲が上

「調子なのか……どっちもね」

「それじゃあ経文や謡曲が君にはわかるのか」

「ぜんぜん——ちんぷんかんぷん」

「わからないで、なぜそれが人間的だ、といえるんだ」

「はじめて謡曲を聞いた外国人が、あの声は何千年もの間、うんと重しをして塩漬けにしていた声だ、重しをとって、聞き耳を立てたら、深い樽の底から陰々と湧きあがってきた声だ、っていったそうよ」

「比喻としては面白い。しかし……」

「私ね、あの声はね、塩漬けにされた声じゃなくて、塩漬けにされた人間たちの怨みやつらみをこめたるめき声——だと思うのよ、そういう意味で歌謡曲の薄っぺらな声よりも、ずっとずっと人間的じゃないか、と思ってるの。意味を知ったらかえって幻滅を感じちゃうかもしれないけれど」

事実、彼女は一度も能舞台を見たことはなかったし、世阿弥も花伝書も知らなかった。彼女はただ直感的に謡曲を捉えたただけなのだが、意外にそれがいまだに亡びない能楽の本質をついているようで、理屈屋の宏の興味をそそったのもたしかだった。

とはいえ、菜美江の趣味には一貫性がなく、絵画などになるとガラリと変ってしまう。謡曲の世界に一種通じ合うようなブリュッゲルなどより、少女的なローランサンや幻想味豊かなシヤガールにあこがれるのである。そのようなアンバランス、つまり現実性と幻想性と、ふたつ

を合わせ持ったような彼女の性格に、宏は強く惹かれていったのかもしれない。

仕事の面で幻滅を味わえば味わるほど、宏は菜美江を求めるようになり、ふたりはつい二、三ヶ月ほど前から、四谷にある宏のアパートで同棲するようになったのであった。

二

お互いに自由を拘束したりはしない、という約束ではじめた同棲生活だったから、菜美江はパー勤めを辞めなかったし、宏の方も、帰宅時間などで、彼女に口出しなど一切させなかった。というのも、ふたりとも同棲生活に自信がなかったからで、いつ別れても、もとのひとり暮らしの状態にすぐ戻れるように、という配慮が自然に働いていたからである。

ふたりが一緒に暮らした三ヶ月という期間は、彼等をひとつのものに溶け合わしてしまうほどの力は持たなかったにせよ、お互い我の強い同士がひそかに危惧していた破壊の危機を、どうやらなくすしにくくしてくれたようでもあった。

それが証拠に、大気が花の香を含んで春の気配がさかんな今日の日和に、ふたりは揃いのVネックのセーターを着こみ、歩行者天国で雑踏する新宿へショッピングにやってきましたのである。「いまごろの季節って大好き。陽の光までがなんだか生きもののようにピチピチ跳ねてる感じ」

陽に洗われて透けたような菜美江の白い素顔が、屈託なく笑った。

「たしかにどの顔も楽しそうだ。みんな希望に輝いているように見える」

「あなたもよ、宏さん」

すかさず菜美江がいった。

「おれはちがうさ」

にこりとみせず、彼は額へかかった髪をうるさそうになでつけた。何にどのように希望を託すのか、いったいこの世の中にそれほど価値のあるものがあるのか、と、憂いをこめた彼の瞳が無言のうちに問いかけているようだ。

ショーウィンドをのぞきこみ、手のとどきそうもない高価な品々にためいきばかりついている菜美江を、宏は叱るようにながして雑踏から抜けた。

デパートの前の横断歩道を渡りきると高層ビル街に入る。そこを通りすぎると広い中央公園のやわらかな芝生がひろがっている。

新宿へ行ってみようか、といい出したのは宏の方なのだ。だいたい彼は人混みが嫌いなくせに盛り場へ行きたがる。狭いアパートでポツンとしているのがどうにも耐えられないのである。しかし、盛り場へ出るとまた人混みがいやになって不機嫌になってしまふという人間でもあった。

頭の上へ倒れかかってくるようなノッポの住井ビルの前へくると、宏はふと足をとめて空を仰いだ。

「あ、このビルに、たしか東真精密建設って会社があるはずよ、二十八階とかいったわ」

宏の真似をして菜美江も空を仰いだ。陽をかえして銀色にかがやいているガラス窓を一、二、三、四……とかぞえていくうちにそれは豆つぼほどに小さくなって、空の高みへ吸いこまれていった。

「なんで知ってるんだ、東真精密を」

歩き出しながら、宏の声が菜美江をとがめているようだった。

「何って、店のお客さんが勤めている会社よ。ま、おかしい、宏さん、妬いてるの？」

「ばかなことをいうなよ、東真精密はおれの親父のやっている会社なんだ」

「あら、そうだったの」

ふりかえりながら菜美江は、

「ずいぶん立派じゃない、あんなところにお父さんいらっしゃるの」

「二十八階全部じゃないよ、ほんの一部さ。ちっぽけな会社だよ、実体は」

「だけど、あなたの会社より大きいんですよ」

宏の勤めている日野土建は東真精密の小会社といっても差し支えなかった。したがって菜美江のいうとおりだった。なぜわざわざ彼が父の会社を敬遠してちっぽけな下請け会社に勤めているのか、菜美江にはまだ理解がゆきかねたのである。

「私だったらああいう立派なビルにある会社に魅力を感じるけど……お父さんの会社に勤めた方が月給だって多いし、すぐに重役になれるし、ずっといいんじゃないかしら」

彼女としては当然すぎるほどの疑問だったが、それはひどく宏の機嫌をそこねたらしく、彼

は走ってきた車をとめると、菜美江をそこに残して、アパートへ帰ってしまったのだった。

三

菜美江自身も母親と喧嘩して家を出ている身である。だから宏の気持もわからないではなかったが、彼女にしてみれば、充分にめぐまれた環境にありながら、なにを好んで……という疑問の方が強かったのだ。

菜美江の家出の事情はなんのことはないお金の問題だった。無駄使いばかりせずに、もう少し家へ入れるとか、貯金をもっとしろとか、口やかましくいう母親春江が、どうにもうるさくてがまんできず、自分が稼いだお金だから自分の自由に費ってどこがわるいの、と捨てゼリフを投げつけて、母親と別居してしまったのである。

だから菜美江はひとりになって、多少楽になったわけだが、宏の場合はそれとは反対に、かなり不自由な暮らしを余儀なくされているはずだ。現実的にものを考える彼女にとって、宏の行動は不可解な部分が多すぎる、といってよかった。

菜美江も母親のことを話すのをあまり好まなかったが、宏も父親のことを話したがらなかった。彼の父仙三が東真精密建設の社長だったことなど、いまのいままで宏の口から一言も語られたことはなかったのだ。

——親子のあいだに、なにか複雑な事情がひそんでいるのかもしれない。

そんなふうに想像をめぐらし、菜美江は宏の感情をなるべく刺激しないように、肉親の話はできるだけ避けるように気をくばった。

宏と菜美江がせっかくの日曜日を憂鬱な気分ですごしたその翌日の朝、住井ビル二十八階にある東真精密建設の社長室で、社長の真山仙三が課長の山野辺洋一を相手に、一通の書類を注意深く検討していた。

どちらかというと線の細い宏にくらべて仙三は、年輩も年輩だが、戦後闇屋から腕一本でたたきあげてきただけに、どっしりと大地に根を生やしたようなたくましさや、その身に備えていた。闘志をむき出しにしない温和な風貌だが、額にきざんだ皺は、戦中戦後の長い風雪に耐え、苦難をくぐり抜けてきた不倒のモニュメントでもあったのである。

「山野辺君」

書類の一箇所を指頭でおさえながら、仙三は若い課長をチラッと見やって、

「これが今度のC大附属地殻研究所の分だね」

「はい、そうです」

主として工事の進行と、資材購入を担当している山野辺洋一は、書類をのぞきこむようにしてこたえた。三十を少しすぎたばかりだが、正直に歳をいってもほとんどの人間が疑うほど、彼は老けて見えた。何事にも慎重で、他人の心裡をよく読む性格が、自然彼を重厚な人間に見せているのかもしれない。

そういうえば、こうしてふたりが顔をよせあっていると、どことなく似ている感じである。同